

生譚に遙かに多く得た所以を知るのであつて、之には何等前例の妨ぐるものは無く、其の思ふまゝに、動物なり人間なりあらゆる形で菩薩を現はす事が出来たのである。(乙、附圖第五、第六)この本生譚は、サーンチーではバルハットよりも少く取つてゐる代りに、前述の第二點を求めて石門を飾つて、先づかの遺骨を得る爲の陣備へを始めとして、涅槃後の場面を現はしてゐる。従つて當然佛陀の姿はない。(乙、附圖第十ノ二。丙、附圖第二十三ノ六三、及び六四)

綜 合

之で中印度の古い佛教美術全體に互つて見たものとしていゝのであり、之についての鍵を得たとも考へられる。バルハット、佛陀伽耶、サーンチー、アマラーヴテーの圓形や額形に現はしてゐるあらゆる主題をよく調べて、論理的で同時に歴史的な一種の配列を作る事も出来たのである。事情が自然に複雑から單純に移つて行き、又説明の立場に最も良い順序になつて來たのである。かくて、全體が餘り單純になつたかとも思はれる。問題は全體が少し